

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K20582

研究課題名（和文）「女流画家」のジェンダー的言説分析—占領期・ポスト占領期の女性運動の一側面として

研究課題名（英文）Discourse analysis of postwar gender politics on Joryu-gaka (women artists)

研究代表者

中嶋 泉 (Nakajima, Izumi)

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・准教授

研究者番号：30737094

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は当初、第二次大戦後の女性の創作活動にかかわる、性別役割規範の変化の経緯を、「女流画家」というキーワードを追うことによって明らかにしようというものだった。しかしながら新型コロナウイルスの流行により、この研究に不可欠だった米国での調査が難しくなったため方法を変更し、1960年代から90年代にいたる女性美術家の資料の収集と分析を国内で行い、日本美術史に対するオルタナティブな美術の歴史記述を目指した。4年間の研究のなかで、書籍や論文の出版、研究発表、研究プロジェクトの発足、国外の女性アーティスト研究組織との連携などを行い、女性美術家研究に関する重要な資料体や研究ネットワークを構築することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、第一に、第二次世界大戦後の抽象絵画の流行における、女性画家の活動について調査し、彼女たちの仕事が歴史的に無視されてきたことを美術批評および美術史的言説のフェミニズム的分析から解き明かした。第2に、60年代から90年代という、全共闘からとウーマン・リブ、フェミニズムへと政治運動が展開していく時代に、女性美術家の女性表象、とりわけ性の表現が大きく変化したことを明らかにした。これらの研究は、美術家のみならず戦後の日本文化の一側面を明らかにする文化ジェンダー研究であり、今後も隣接領域の研究などに役立つのではないかと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study was initially intended to clarify the history of changes in gender role norms related to women's creative activities after World War II by tracing the key term "women painters. In the course of four years of research, I collected and analyzed materials on women artists from the 1960s to the 1990s in Japan, with the aim of writing an alternative history of art to Japanese art history. The research outcome were published, presented. We also launched research projects, and collaborated with women artists' research organizations outside of Japan, and were able to build an important body of materials and research network on women artists' studies.

研究分野：フェミニズム美術史

キーワード：女性美術家 フェミニズム アート ジェンダー 日本美術 戦後美術 近代美術 現代美術

#### 1. 研究開始当初の背景

戦後の日本美術史は美術家、批評家、歴史家ともにジェンダーバランスを欠いていた。しかし事前調査を行なった結果、草間彌生や田中敦子のようなよく知られる女性美術家以外にも、多くの女性美術家（や美術家になりたかった女性たち）が存在したことがわかった。そのため、現状で受け入れられている美術史とは異なる、女性の活動を含めた美術の物語を構築する必要があると考えた。

#### 2. 研究の目的

上記のような美術史的事実を踏まえ、第一の目的は女性美術家に関する、伝記的情報の調査、作品調査、評論資料の収集、本人もしくは近親者からの聞き取り調査をすることであった。さらに、これらの調査で集められた資料をもとに、何人かの女性美術家の作品分析と活動歴の調査を重点的に行い、彼女たちの仕事における既存の美術史から逸脱する要素を明確にし、ジェンダー分析の観点から作品評価の見直しを行うことを目的とした。

#### 3. 研究の方法

研究は調査対象を見つけることから始まっており、その際、小勝禮子や北原恵、笠原美智子らの研究や展覧会記録をあたって調査対象を選んだ。国会図書館、国立新美術館、国立近代美術館、東京文化財研究所などで、これまであまり関心を持たれていなかった、40年代末から60年代初頭までの女性美術家や美術グループの活動の動向を、様式史的観点ではなく、制作、発表の条件や、日本の戦後美術界における女性美術家のアイデンティティの成立過程を注視するかたちで分析した。同様の調査、分析を、1970年代から80年代の美術家についても行なった。作品解釈にまで進むことができた研究対象には、草間彌生、田中敦子、福島秀子、岸本清子などが含まれており、彼女たちが個別に確立した表現様式を、主流美術に対するそれぞれの応答として見直すとともに、戦後日本美術界で生き残るための処世法としての創作活動という側面も重視して分析した。

#### 4. 研究成果

研究成果はまとめると主に3点となる

##### 1) 戦後の女性美術家による抽象絵画様式の研究：

当初研究のために行なった国内調査から、占領期からその後にかけて、米国と日本の美術の関係が、展覧会や政府関係者、航空会社関係者のコレクションなどから作られた面があったことが解明された。1960年代にかけて、日本の同時代美術は、欧州から米国へと目を向けるようになり、この変化やそれにまつわるネットワークが、何人かの女性美術家のニューヨークを中心とした米国都市への移住を促したことがわかった。戦後、1950、60年代の文化的状況を象徴すると言える彼女たちについて、これまで展覧会などで出品されることがあまりなかった作品や、残されていた制作ノート、書簡などを探し出し、どのように特定の表現様式を確立したかを調査した。こうした資料の一例として、渡米してシアトルに滞在した草間のワシントン大学所蔵資料や、ブルックリン美術館に残された資料、ニューヨーク近代美術館のアーカイブ資料がある。これらの資料からは、草間が西海岸美術と自身の日本画出身の画風を再編し、新たな表現言語を導き出していたことが明らかにされた。草間を含む研究の成果は2019年に出版した著書『アンチ・アクションー日本戦後絵画と女性画家』（ブリュッケ）で発表し、いくつかの研究発表会で報告した。

##### 2) 戦後日本における女性美術家の言説に関する研究：1940年代後半から、1980年代にかけて、女性の美術家を評する批評がどのような傾向を持つか調べるために、『美術手帖』、『芸術新潮』、『みづゑ』、『三彩』をはじめとした美術誌を網羅的にあたった。その結果、戦前世代の美術批評家は多くの新人女性美術家を見出したが、批評は概ね父権的な調子に彩られ、若い女の価値を身体性や「おんならしさ」に傾倒するものであったことが判明した。同世代の批評家も同じような傾向を帯びていたが、1950年代待つより、抽象美術の流行と美術界の国際化の時代に際し、米国で主流になりつつあった抽象普遍主義的な批評態度を取り入れ、女性の美術家の一時的な評価につながったことがわかった。こうした戦後美術の批評言説の研究は、敗戦後の民主化や国際主義のなかで美術の家父長制、男性中心主義の揺れを明らかにするものと考えられ、一元的な日本戦後美術史を解体する視座を示したと考えている。

##### 3) 1960年代以降の女性美術家：戦後増加した女性美術家は、1950年代の逆コースに合わせて浸透した核家族モデルと女性の主婦化の流れのなかで、多くが姿を消していった。本研究ではこの時期の美術誌、文化誌をあたることによって、この時期の女性美術家の実

態についての調査を行なった。調査からは、全共闘と性革命の1960年代、ウーマン・リブの70年代、「女性の時代」と呼ばれる1980年代にかけて、女性美術家は自己認識とアイデンティティの形成に関して、時宜に応じた様々なネゴシエーションと処世法を生み出すことを余儀なくされたことが理解された。この研究の一部は岸本清子を対象に行われた。すでに基礎研究のある岸本清子については、彼女が活動の初期において女性である自己の否定を強く意識していたことが明らかにされていたが、その後1970年代末から様々な女性表象を手がけることで、女性イメージが商業的に消費される70,80年代において、消費されない女性の表象を探索していたことがわかった。この研究は、欧米と異なり、70年代フェミニズムとの関係が薄い日本の女性美術家がくぐり抜けた環境と、到達した特殊な創作を説明するものだと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 中嶋 泉	4. 巻 73
2. 論文標題 福島秀子	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中嶋泉	4. 巻 73
2. 論文標題 日本の前衛と女性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 62-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中嶋泉	4. 巻 31
2. 論文標題 「阿部展也ーあくなき越境者」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『美術ひろしま』	6. 最初と最後の頁 44/45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中嶋泉	4. 巻 70
2. 論文標題 「「具体展」の今とこれから」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アートランブル	6. 最初と最後の頁 4/5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Izumi Nakajima	4. 巻 159
2. 論文標題 Anti-action: Atsuko Tanaka and the Aesthetics of Mass Culture in Postwar Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Les cahiers du musee national d'art moderne	6. 最初と最後の頁 16-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中嶋 泉	4. 巻 第25号 (通巻42号)
2. 論文標題 エロスの政治学：1960-70 年代の「日本の」美術	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ジェンダー研究	6. 最初と最後の頁 25-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中嶋 泉	4. 巻 247
2. 論文標題 具体美術協会と女性美術家	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立国際美術館ニュース	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中嶋 泉	4. 巻 -
2. 論文標題 「展示」と「フェミニズム」が交差する場で レビュー：「フェミニズムズ/FEMINISMS」・「ぎこちない会話への対応策 第三波フェミニズムの視点で」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ウェブ上に投稿「レビュー&レポート」 ( <a href="https://note.com/misonikomi_oden/n/nddf1f8901b75">https://note.com/misonikomi_oden/n/nddf1f8901b75</a> )	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Izumi Nakajima	4. 巻 -
2. 論文標題 Shigeko Kubota, Mayumi Hamada, Mihoko Nishikawa, Azusa Hashimoto, and Midori Yoshimoto Viva Video! Art and Life of Shigeko Kubota	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 CAA Review (オンライン上の公開 <a href="http://www.caareviews.org/reviews/4032#.ZGCbsS2MtaU">http://www.caareviews.org/reviews/4032#.ZGCbsS2MtaU</a> )	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Izumi Nakajima
2. 発表標題 Anti-action: Post-war Abstract Paintings by Japanese Women Painters
3. 学会等名 Women in Abstraction, another history of abstraction in the 20th Century (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中嶋 泉
2. 発表標題 戦後美術と女性作家
3. 学会等名 田部光子展「希望を捨てるわけにはいかない」記念講演会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中嶋 泉
2. 発表標題 「エロス」の政治学：1960年代末から1970年代はじめの日本と美術
3. 学会等名 シンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中嶋 泉
2. 発表標題 「女が描くこと、フェミニストが書くこと」
3. 学会等名 2020年度第35回「女性史青山なを賞」公開講座（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中嶋泉
2. 発表標題 「日本から海外へ：展覧会 欧米；編」
3. 学会等名 「STARS展」関連シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中嶋 泉
2. 発表標題 「草間彌生 ニューヨークー東京」（連続公開講演会 ニッポンとアメリカ）
3. 学会等名 立教大学アメリカ研究所（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中嶋 泉
2. 発表標題 日本現代美術批評と女性美術家
3. 学会等名 「生産／実践としての批評」(Art Criticism as Creation/Practice)（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年～2023年

1. 発表者名 中嶋 泉
2. 発表標題 光田由理氏、加治屋健司氏との鼎談
3. 学会等名 文化庁アートプラットフォームシンポジウム「日本の現代美術を翻訳する：言説、文脈、歴史」（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中嶋泉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ブリュッケ	5. 総ページ数 362
3. 書名 アンチ・アクション 日本戦後絵画と女性画家	

1. 著者名 石川卓磨、中嶋 泉、森啓輔	4. 発行年 2022年
2. 出版社 niddle-noddle	5. 総ページ数 52
3. 書名 『渡辺泰子「A MAP THEY COULD ALL UNDERSTAND」』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>ガーリーフォトの戦術 長島有里枝 『「僕ら」の「女の子写真」から わたしたちのガーリーフォトへ』  <a href="https://note.com/misonikomi_oden/n/ne968e19d2447">https://note.com/misonikomi_oden/n/ne968e19d2447</a></p>
--



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------